

◆2009年 8月

八木健選「七句」・・・（鑑賞も五七五）

1. **噴水の投げ遣りとなる高さかな**（西 をさむ）
噴水の初めは直情径行で
2. **楽しげに不便をかこちキャンプ村 する**（前川敏夫）
缶切りとマッチ忘れた思い出も
3. **紙魚なげくほどの歳時記なれどボツ**（坊野留吉）
悪いんじゃないか歳時記の紙の質
4. **蝸牛空き巣狙いが心配で**（麻生やよひ）
蛞蝓(なめくじ)の身軽や家を置き去りの
5. **まじの風宮崎県庁執務室**（工藤泰子）
まじの風永田町では竜巻に
6. **世辞なんて言わなくていい殿様蛙**（鈴木和枝）
足軽の蛙はとかく饒舌で
7. **俳諧の道はいよいよ五月闇**（永島董玉）
俳人の魑魅魍魎となる気配

青山桂一

鯉洗ふムーンサルトの夏の鯉
庭手入れ八方から蚊に攻められて
行々子土手の茂みと競ひをり

秋月裕子

緑蔭の風しがらみを解いてゆく
夏風邪に次亜塩素酸手放せぬ
クッククック夜明けの鳩が松葉菊

麻生やよひ

落語では黴た豆腐が主人公
筆跡の鑑定不可能落し文
蝸牛空き巣狙いが心配で

足立淑子

落語では黴た豆腐が主人公
筆跡の鑑定不可能落し文
蝸牛空き巣狙いが心配で

有富洋二

好天はほどほどの雨蝸牛
牛の尾の右へ左へ蠅踊る
目高らの網目くぐりのイリュージョン

安藤淑子

妙麗か、はた老齡か黒日傘
えいままよ白髪のままよ梅雨籠り
トマト植えアイアム農婆薯を掘る

井口寿々子

格闘技十葉強く膝笑う
草笛のとぎれとぎれの息づかい
笑うとも哭くとも見えず水馬

池田耕川

獅子の威を投げ伏す檻の青葉下
七変化順序不同は世の習ひ

伊藤浩睦

史実とは勸悪懲善家康忌
母の日や母になれないおかまみて
五月雨や蒟蒻温め臍の下

井野ひろみ

あめんぼう映れる雲に乗りにけり
色は黄と決めて薔薇苗選りに選る
熱情といふ名の薔薇の紅蓮なる

越前春生

意味もなく人にあはせて心太
昼寝覚すぐには四肢の繋がらず
ソーダ水二人で吸つてゐるも恋

笠 政人

蛸の足断たれて尚も吸着す
捕りそこね蠅虎蜘蛛の澄まし貌
更衣衰へたりな力瘤

加藤澄子

沈下橋に足を投げ出し螢の夜
螢船灯りを消して岸に寄る
螢やお前は誰の魂ぞ

川島智子

青嵐帽子追ひかく老紳士
子鴉の寝ぼけ声出す午前二時
親在りて親知らず抜く梅雨最中

久我正明

かたつむり両目を開けても片つむり
省エネの光を投げ螢かな
美しき骨になりたるオコゼかな

有吉堅二

古里に錦飾れずサングラス
思考停止きのふもけふも冷奴
花魁草言ひ値で買ひて帰りけり

飯塚ひろし

言ふ程に精はつかざり蝮酒
全校と云ふも八人草を刈る
夏薄団十三文の足を出し

井口夏子

わびさびはぬけてのつそりかたつむり
見上げれば頭の下がる藤の花
羽抜烏威嚇の鳥にスタスタス

池田無了

天地悠々時速一尺蝸牛の恋
百円ビール百円パンツタ涼み
蚊に刺さる打たれし親の仇とや

稲沢進一

とりあへず婦唱夫随や冷奴
特売日仲間外れのメロン買ふ
百年に一度の不況鳥帰る

今城夏枝

傾き走る梅雨晴れの予讃線
つばめ語の早や饒舌に燕の子
仏壇に笑ひ父の日の父は

奥脇弘久

単衣着て素足に下駄の細身なる
葛餅やつると逃げし大師の縁
七変化ミセスクミコの嫉妬心

可知豊親

扇風機上下左右に気を配る
ステテコが宅急便に判を捺す
季重りハンケチで汗拭くなかれ

加藤 賢

緑蔭の幹のほど良きくねりかな
父の日や母を口説きし父知らず
萎れしは朝な取り除け菖蒲園

北村真佐子

子燕のためらいかすかなる風に
父の日の留守番の父晩酌す
父の日の昼頃寝父の日と気づく

工藤泰子

まじの風宮崎県庁執務室
万緑やみどりはふところ深くあり
夏雲立つ群来群来群来と押し寄せて

倉方 稔

無職とて今日も暇なし時鳥
朝顔をひい・ふう・みい・と今朝もつ
い
行きつ戻りつ姥捨の駅薄暑

黒田忠一

スタートは朝の五時です桜桃もぐ
桜桃もぐ梯子に命縛りつつ
朝七時作業終了桜桃もぎ

小玉石水

運動会先生も一緒に走るなんて
図書館におれば紙魚さんおいでやす
時くれば必ず至る花散華

佐治洋一

ビール禁酒国日ごと夢見る麦酒かな
無しここはクエート大砂漠
合言葉先ずはビールの同窓会

佐藤義子

兜かぶり新聞紙で我慢して
御利益よ御獅子より頭パクリ
一步前へ足出ない孫よだれ出る

佐野ゆきこ

ビワ熟す狙うは我とハクビシン
犬歩く日傘の影と一になり
炎天下日影さがして遠回り

清水呑舟

小遣いを目当でも良し浮いてこい
殿を走る生涯走馬灯
夫婦して岐路のいくたび遠花火

寿命秀次

日曜日田植機だけをこき使へ
地球から馬鈴薯ごろごろ生ませけり
退屈な犬に牽かれて梅雨晴間

杉村福郎

解放の歓喜にの逸り子蜘蛛散る
時の日やわが家の時計よく進み
形代に御神酒の息を吹つかけり

鈴木 清

八工を追う尻尾の外にまた止まる
郭公が止まらずに続く子らの歌
おか蛩同時点滅息が合い

黒澤正行

蠅を打つオバマー茶に叱られる
蚤虱見たいとせがむ幼かな
向い岸ここじやここじやと行々子

小杉 隆

冷房を炬燵でONに爺の居て
滅種おそれベットに蚤虱
胸そらし私どうおと百合の花

桜井宇久夫

臺跳ぶ滑稽の世に目覚め
オランダ産鱈の干物をほぐす箸
ビニールの葉も旨さうに水羊羹

佐藤古城

母の手を抜け裸児の上機嫌
まんじゆしやげ
どれもはだかやふるとは
鳩潜り蘭寿

佐野萬里子

日食や天の岩戸の神思ふ
皆既にはならずともよし夏涼し
地鎮祭地の神呼ぶにはたた神

柴田真一

顔洗ふ鼻髭のごとシャボン玉
晴れ男お原庄助梅雨に泣く
凌霄花けはしき噂にふり向かず

首藤虎男

棚田植素人集め手塩掛け
女郎花名にこだわねし黄色声
かみなりが雨雲おとし虹ごろ寝

白井道義

ごきぶりの居ない厨はつまらない
田植え機に若葉マークを付けて行く
一回り違ふ姉妹や更衣

鈴木和枝

世辞なんて言わなくていい殿様蛙
握り拳広げればらつきよ漬け上手
紫陽花これでいいかと開港の日

鈴木みのり

父さんと私のたれ目夏帽子
左手で方向転換水すまし
猫も私もお腹を出して昼寝中

高田敏男

はたた神地上に落ちて誤算かな
許可を得て抱かせてもらい竹婦人
ナイターや阪神半疑トラ負ける

高橋真紀子

イライラも吹き飛ばしたる団扇かな
花瓶割る煩き八工を打ち損ね
娑婆に出て集団自殺のミミズかな

高橋素子

少年に大人の臭ひ栗の花
ブラジル時間ここにも刻み時計草
夏痩せやメタボの友の羨望叩

田代青波

青梅雨の歩行マシーンひたすらに
猫に開きぬ冷房の自動ドア
源五郎後肢アチャコの歩きぶり

種谷良二

一粒の苺の起こす喧嘩かな
单身や玉葱切りて涙ぐむ
緑陰に避難してをり乳母車

飛田正勝

空豆を剥ぎ剥ぎ数をかぞへけり
父の日や父ならどう言ふこんな時
メ切のまだある暮し冷酒酌む

永井一朗

東京へでで虫転居させられり
四肢もため蛇は振じれて睦みけり
蚊を打つて運命線を汚しけり

永島董玉

雨男梅雨の晴間に罷越す
朱唇よりほろりほろりと枇杷の種
俳諧の道はいよいよ五月間

西 をさむ

雑貨屋の首の回らぬ扇風機
噴水の投げ遣りとなる高さかな
蜘蛛の罟の向う地獄の三丁目

彦阪義久

肉襦袢まだ脱ぎもせず更衣
初夏の改革開放女学生
恋歌を一曲そして去る蛩

高田菲路

生身魂入れ歯預けて寝に就きぬ
晩酌を抜かれて父の日と知らず
琉金の腹を褒めをるメタボ哉

高橋 都

殻とちてまひまひ海をなつかしむ
無農薬野菜とカメムシ届きたり
鳴焼よりステーキが好き義母卒寿

田代青山

通天閣のどんぶり頭蚊喰鳥
六月の空をペコちゃん斜に見る
をんなにはをんなの道理蠅叩

田中章子

風薫る阿修羅様のご上京
五月闇いやにきれいに見える女
蛇いちごアダム嘘つきイヴにあげ

田村米生

冷奴冷たい奴と読まれけり
出目金よおまへの餌も中国産
苺食ぶ口が真つ赤な嘘を云ひ

戸谷笑子

おかめうどんに
ひよつとこ口や浴衣がけ
晴女梅雨には勝てぬ傘持ちぬ
梅雨深し滑稽菌の増殖中

中沢荘荷

ビール飲み微熱の憂さは云はずをり
梅雨寒の図書館通りに寄席のピラ
抜歯して西日の中を帰りけり

囃 崇子

理想ですピンピンコロリ車中談
庭の花赤白緑無限色
もう六月やまだ六月か意気の岐路

原田 暉

父の日と父は知らざる夕餉かな
釣り銭を取り忘れたる梅雨入りかな
雷轟や電信柱直立す

久松久子

はったいやふいを衝かれる胸三寸
筍の十二単を脱がしゆく
昼寝して寿命伸ばしてみたりけり

日根野聖子

決心や青梅ほどの大きさの
身の程のものを負ひけり蝸牛
我先に流れんとする梅雨出水

藤岡蒼樹

砂風呂を出て軽し身や蛸刺身
車止め人口浜の闇涼し
黴匂ふ別居夫婦の縋れ糸

坊野留吉

河鹿鳴く泣けば瘦せるか我もかな
紙魚なげくほどの歳時記なれどボツ
蜜蜂の地球脱出早過ぎる

堀川亮二

ぐうちよきばあと遊びをる雲の峰
玉と喉ごくごくころろラムネ飲む
やや猫背あの人らしきサングラス

松尾軍治

桑の木に口裂け女笑つてる
風鈴のさわがしき音に熱くなり
夏休み始まる前にズル休み

丸山紘一

夏来る阿修羅に魅入るギャルの群れ
梅雨入る日心眼のショパン馬齡撲つ
世紀とや憂き世の似合ふ桜桃忌

三塚不二

生きざまを丸出しにして蜘蛛は罠に
半畳に寝る山小屋の詰め殺し
ほととぎす空き巣狙いにご用心

無患子

さ蕨を採る音たのし今朝ミファソ
しまらしのプリント模様のやまかがし
よ
春ざむの温泉の底しろしわが脛なれど

むつみ

夏衣胸毛脛毛をもちろに出し
鮎釣りの仲間釣りたる素人かな

百千草

主婦業に残業つかず合歓の花
シャワー全開今日の私にご苦労さん
がんばれぬ時もあります時鳥

広瀬遊亀男

拐わかす色の揃えり罌粟の花
参道にウィンクという紅あじさい
短夜やおたまじやくしが降ると言う

二神重剛

手づまりの会議そろそろほととぎす
あしびかな影は短かく日は長く
今日の日を気温裏切る更衣

星加克己

梅雨迫る歯科医の顔の近づけば
深井戸を覗いてをりぬ旱星
その臭ひ十薬として諾へり

前川敏夫

楽しみに不便をかこちキャンプ村
裏側を覗いてみたし雲の峰
叫びあげたのはゴキブリか体重計

松田吉憲

妻好むものばかりなり冷蔵庫
不覚にも妻に本音や青葉冷
働かずゐてそれなりの日焼かな

三木蒼生

蛇五尺戦利品とし猫帰る
ジェット風船悪役にナイター果つ
夏痩せといふリストラのごときもの

三橋一笑

蜘蛛の罠を
凝つてるなあと見上げる子
枇杷の実の傘届くまで盗られけり
夕焼や遊子愉しむ千曲川

虫倉蟬音

人知れず灯火親しむ一書かな
暗がりにぼそつと物言ふ案山子かな
大振りのてるてるぼうず雨月かな

村上美和

玉葱を吊るためだけの屋根普請
丸焼けの一山緑雨漕漕と
夏めくや長き手脚の少女たち

森岡香代子

そうめんの白糸の滝ひと飲み
舗装路の熱をさまして夕立かな
焼石に水湯水のダム腹

森 要

雨傘が陽傘に変わるつゆ晴れ間
道の邦雨期が無いとはつゆ知らず
色かたち競う姿や花菖蒲

八木 健

胸を張る宇宙メダカの子孫だと
雨乞ひに応え過ぎたる梅雨出水
泳ぐこと忘れ浜辺の水着たち

山内重昭

殺すにも採算はあり御器退治
オービスをくぐり加速す梅雨晴間
…一四三下七九梅雨じめり

山口濤聲

のつしりと夏の居すはる岬の尖
白玉や漢の入る甘味処
青芒溶岩（ラバ）のあばたを飾るかに

山本あかね

おじぎそう幼なけれどもはにかめり
坊さんが青田月夜を戻り来る
心太耳痛きこと聞き流す

諸中昌之

甚平の作家もどきや虚言癖
わが家は都のたつみ蠅ぞ棲む
忍び込む光る源氏と言ふ蛭

柳澤京子

ゼラニューム賞めて株分けして貰う
毬のごと東西南北七変化
父の日に目覚めるごとく夫厨

山口えつこ

雲の峰ビルの谷間の影ならん
地平までじゃがいもの花ふる郷は
向日葵や六十路半ばの受く辞令

山下正純

パステルの織成す綾や七変化
青枇杷の膨れ仕上がり吹きガラス
かたつむりバックパッカの一種なり

山本けい子

なめくじら塩を振られてしまひけり
耳朶に蚊の囁いてゐる堂静か
桑の実の食べた証拠の口開く